

朝を
ひらく

「健全な精神は、健全な肉体に宿る(A Sound Mind In A Sound Body)」と言ひ。本当にそうだろうか。実はこれは誤訳である。この諺の作者、古代ローマの詩人・ユウエナリスは、若者が身体を鍛えるだけで勉強しないことを嘆き、「健全な肉体には、健全な精神も宿ってほしい」と言ったのである。

ユウエナリスの嘆きは、今も続いている。身体能力を極めたトップアスリート達の犯罪が後を絶たないからである。金メダルを二度もとった某柔道選手の事件はまだ記憶に新しい。これ

肉体と精神

永田 円了
真国寺住職

も氷山の一角、詳しくは「スポーツ・ヒーローと性犯罪」(大修館書店)を参照されたい。

オリンピックは、肉体と意志と知性の資質を高揚させ、均衡のとれた全人を目指す人生哲学である(オリンピック憲章より)。精神と肉体のバランスをどうとるのか、これが課題なのである。大学に一芸一能の入試制度が導入されて久しい。一つの技能に秀でることは素晴らしい。しかし、それは必ずしも知

性、精神性を育むモチベーションが高いとは限らない。

世はもうすでに2020年の東京オリンピックでのメダル数の皮算用が始まっている。アメリカでトップアスリートを対象にアンケートが実施された。

オリンピックで金メダルがとれるなら、5年後には死をもたらす薬でも使いますか、との問いに、52%が使うと答えた。一生に一度でもいいから、世界中から「すごいね!」の称賛を得たい、自分の存在を認めて欲しい。そのためには、手段を選ばないということなのか。何か哀しい。もっと温かみのある競争のやり方があるはずである。

フィギュアスケート選手、ジ

ヤネット・リンを覚えているだろうか。札幌五輪(1972年)当時18歳、金メダルが期待されたプレッシャーの中、転倒、尻もちをつきながらのあの笑顔が日本、いや世界中を魅了した選手である。観客は彼女の笑顔の中に、人間の持つおろかさ、**「転んだっていいじゃん**いか、人間だもの」を見た。メダルをとりたいただけのために、肉体を鍛えたアスリートとは何か違うものを、世界は見たに違いない。

彼女の精神的な豊かさは、当時学生だった私の心にも深い感動を与えた。衝動的にファンレターを出した。たどたどしい英語でその時の感動を綴った。2カ月後、思ってもいなかった便りが彼女から届いた。レターサイズの写真に彼女のサインと私のファーストネームが手書きされていた。

転んだっていいじゃん